

石川県高校職員成病人集団検診

第 1 報*

金沢大学結核研究所臨床部外科

村 沢 健 介

松 本 吉 典

金沢大学結核研究所細菌免疫部（主任：柿下正道教授）

福 山 裕 三

（受付：昭和41年3月30日）

は し が き

最近成人病特に胃癌あるいは高血圧症に対する検査術式あるいは治療方面の進歩にはめざましいものはあるが、反面統計的に見ると、成人病による死亡率は年々増加の傾向をたどっている。その原因の一つとして、無自覚性の、あるいは訴えはあるが、知識不足により胃疾患特に胃癌あるいは高血圧症が放置され、医療施設を訪れた時にはすでに末期の状態を示し治療時期を失っている例、すなわち「手おくれ」の患者が意外に多いことが目立つ。治療法の原則は疾病の予防であることは論をまつまでもないが、発病せる疾患に対しては早期発見、早期治療を行なうことこそ最も望ましい。かかる見地に基

づいて最近各地で成人病集団検診が行なわれ、たとえば胃癌の早期発見によりその手術後5年生存例もふえ、高血圧症例による合併症が減少する等着々その成果があげられている。³⁾

私達もすでに昭和36年来成人病集団検診を行ない、胃疾患あるいは高血圧症の早期発見にとめると共に民衆のけいもう運動を行ないその成果を成人病集団検診第1報、第2報として発表している。¹⁾²⁾

今回は石川県高校職員40歳以上650例を対象として成人病集団検診を行なった昭和38年度の結果を報告する。

実 施 方 法

私達は表1の編成により成人病集団検診を行なった。

表1 成人病集団検診編成表

- I 成人病集団検診並びに精密検診担当
医師：村沢健介、松本吉典、福山裕三
レ線技師：福田英雄、西家倜彬
石川県教育委員会保健体育課
林 繁夫、林 英一、細川百合

検査補助者 2名

II 集計担当：村沢健介、細川百合、補助者 1名

実施要領は成人病集団検診第2報と同様で²⁾、調査表作製→尿検査→血圧測定→採血→胃間接レ線撮影→胸部打聴診、腹部触診の順に検診を行ない、造影剤は第一製薬製「バリアンS」を使用した。胃部間接レ線撮影はすべて立位正面で背腹となし、順序は第1回は1口（約20～30 cc）のまし撮影、第2回は残り全量（計

* 本論文の要旨は第11回日本学校保健学会総会で発表した。

150 cc) をのまして直後, 引き続き第3回は第1斜位で撮影, 第4回は20分後撮影と計4枚の Film を使用した。その他, 問診, 検便, 調査表作製と Film の整理, 間接レ線撮影 Film の読影, 異常例の摘出などの実施要領は第1報の方法に準じた。¹⁾ また要精密検診例に対しては, 金沢大学結核研究所附属病院におい

て, 胃液検査, 胃液細胞診, 胃部レ線透視および直接レ線撮影, あるいは特殊レ線撮影を実施し, また高血圧例あるいは心音異常例に対して心電図検査を追加する等, 診断の確実性を期したことは今までの実施要領と同様であった。^{1) 2)}

I 胃集団検診成績

検診人員は検査対象 650例中 546例 (84.0%) で, うち男性521例中480例 (92.1%), 女性199例中66例 (51.1%), と受診率は男性に多い。

胃間接レ線所見における腫瘍, あるいは潰瘍の判定は陰影欠損, ニッシエ, 辺縁不整らの異常所見あるいは通過障害像らであるが, それら異常所見とその他の諸検査事項を加味して抽出した要精密検診例は546例中53例 (9.7%), で, 男性480例中48例 (10%), 女性66例中5例 (7.5%), とやや男性に多い。精密検診例の受診率は53例中49例 (92.4%), であった。

精密検診例を含めての胃集団検診成績は表2のごとくで, 胃潰瘍3例 (0.6%), 同疑7例 (1.4%), 十二指腸潰瘍4例 (0.8%), 同疑6例 (1.2%), 胃十二指腸潰瘍2例 (0.4%), で全例すべて男性であった。胃炎は38例で, うち男性36例 (7.5%), 女性3例 (4.5%), と男性に多く, 胃下垂は62例で, うち男性39例 (8.1%), 女性23例 (34.8%), と逆に女性が4倍も多い。その他の2例はヒルシスルプング氏病, 爆状胃の各1例で共に男性例であった。異常所見なしは404例で, うち男性365例 (80.2%), 女性39例 (62.1%), と女性に少ないのは胃下垂例が多かったためといえよう。胃切除後の状態は17例で, うち男性16例 (3.3%), 女性1例 (1.5%), と男性が大多数例を占めていた。次に年齢別との関連性を求めると, 胃潰瘍は50歳より増加の傾向を示すも十二指腸潰瘍は40~49歳の中年層に多く, 胃炎はその中間年齢すなわち45~50歳の間に多い。この結果は従来報告とほぼ一致した所見であった。

私達は今まで胃集団検診の実施に際して, 胃間接レ線所見, 検便潜血反応および訴え調査の三者を必須検査事項として述べてきた。その中

でも特に訴えない群より無自覚性の胃疾患を早期に発見し, 早期に治療にもって行くことこそ上記において述べたように最も肝要なことである。そこで表3のごとく発見疾患と訴えの有無との関連性を求めて見た。訴えなき349例中77例 (22.0%), に有所見例があり, 一方潰瘍あるいは同疑群の訴え陰性例は22例中12例 (54.5%), も数えられ訴え陽性例でも全例その訴えは軽度であった。このように胃集団検診においては無自覚性の胃疾患を早期に発見することもさることながら, 従来の報告に見られるように, 胃癌, 胃潰瘍, あるいは慢性胃炎の訴えは, 胃部疼痛, 重圧感, 不快感, 膨満感, 過酸症状, 食欲不振および倦怠感等で三者に特徴的な訴え所見はつかめなく, また訴えはあるが, 胃間接レ線所見上無所見例も少なくない。^{1) 2) 3)} しかし表3のごとくに中等度以上訴え群12例中6例 (50%), 軽度訴え群109例中32例 (29.2%), と訴えが強くなるに比例して有所見例は多くなっている。すると胃集団検診においては, 胃間接レ線所見上異常なき例あるいは検便潜血反応陰性例でも訴え強い群の精検が望まれることになり, このことに関しては私達もすでに第2報において発表し, 強調している。²⁾

次に表4のごとく検便潜血反応と発見疾患別との関連性を求めて見ると, 男性においては実施460例中45例 (9.7%), が陽性, 23例 (5%) が疑陽性, 392例 (81.6%), が陰性例であり, 女性においては実施59例中8例 (13.5%), は陽性, 5例 (8.4%), 疑陽性, 46例 (77.9%), が陰性であった。これを有所見例別に見ると男性においては陽性45例中20例 (44.4%), 疑陽性23例中9例 (39.1%), 陰性392例中81例 (20.6%), が有所見例で, 陽性例ほど有所見が

多い。女性においてもほぼ同様の傾向を伺えた。これを疾患別に見ると潰瘍あるいは同疑の大多数例は陰性であった。従来胃集団検診における検便潜血反応の価値について種々論議され不必要説も出されているが²⁾、私達の結果においても明白なように陰性例よりの発見例が案外に多い。しかし陽性例ほど有所見例が多いことより私達は陽性例に対しては2回検便潜血反応を実施し、2回共陽性群は間接レ線所見上無所見例でもあるいは胃症状の訴えなき例でも要精

検例として抽出し、かくれた所見を発見できた経験よりやはり一応必須検査事項と考えている³⁾。

胃集団検診後記

精検後要手術を進められた胃潰瘍3例中2例、十二指腸潰瘍4例中1例、胃十二指腸潰瘍2例中1例、ヒルシスプルング氏病1例は手術を受け経過良好復職し、未施行例は疑例と同様現在経過観察中である。

II 高血圧集団検診成績

高血圧検診における諸検査要領は第1報および第2報に準じた¹⁾。

検診人員は胃集団検診例数と同様であった。表5は縮期圧、表6はち期圧を示し、これらのひん度曲線を男女別に示したのが図1である。縮期圧では年齢の増加に比例して高い血圧を示す例数が増加し、男性においては、55～59歳より50～54歳の23.3%より31.2%と140～159 mmHgを示す例数が増加し、160～179 mmHgを示す例数は50～54歳よりやや増加している。例数のひん度曲線を示す最高のPeakは男性においては縮期圧では55～59歳で120～139 mmHgより140～159 mmHgへと移動を示し、同年齢に160～179 mmHgおよび180～199 mmHgを示すカーブも軽度の上昇を示している。すなわち55歳より縮期圧の高血圧症状が出現するものといえよう。一方ち期圧では最高のPeakは45～49歳では70～79 mmHgのものが50～54歳では80～89 mmHg、55～59歳では70～79 mmHgおよび90～99 mmHgと2峰性を示し、60～64歳では90～99 mmHgと、年齢の増加と共に高い血圧を示す結果を得た。従ってち期圧は縮期圧より早く50歳で高血圧症状が出現するものといえよう。女性に関しては例数が少ないため参考までにとどめた。

上記の血圧を第2報同様Masterの規準に従い分類すると表7、8および図2のごとくで、縮期圧では50～54歳より潜在性高血圧症と見なされる亜高血圧症例が増加し、55～59歳で高血

圧症例が50～55歳の2倍を示す結果を得た。ち期症では潜在性高血圧と見られる亜高血圧例は50歳より増加し、高齢になるに比例し、徐々にあるが増加を示している。高血圧群は縮期圧同様55～59歳で増加を示していた。従ってMasterの規準によれば縮期圧、ち期圧共に亜高血圧例は50歳より増加し、55歳で高血圧例が増加する傾向が伺えた。

さらにMasterの規準による分類を表9のごとく縮期圧およびち期圧を組合せ観察した。血圧正常群は82.2%、異常群は17.7%でこれを年齢別に見ると40～44歳群を除いては、正常群は年齢と共に減少し、異常群は年齢と共に増加していた。各群別に見るとI群の高血圧、高血圧群は9.7%と最も多く、次でⅧ群の正常、亜高血圧群3.7%、Ⅵ群の亜高血圧、正常群3.3%の順で少なくなり、以下の群では有意の差は見られない。これを年齢別に見るとMasterの規準において縮期圧、ち期圧共に亜高血圧例の増加を見た50～54歳群では各群において例数の増加を示し、特にIV群の亜高血圧一高血圧群、Ⅵ群の亜高血圧一正常群、Ⅷ群の正常一亜高血圧群では45～49歳群の2～4倍の例数を示していた。一方I群の高血圧一高血圧群では各年齢層を通じほぼ一定の%を示していること、また全例既往歴例であることより現在までの高血圧管理がゆきとどいていたものと考えている。高血圧症群および心音異常群より抽出した45例に対する心電図検査の結果は高血圧性心疾患13例、

動脈硬化症 5 例, 同疑 6 例, 洞性心臓 2 例, 心室性期外収縮 1 例, 心房性期外収縮 1 例, 冠不全 1 例, 右室肥大 2 例, 大動脈閉鎖不全 1 例, 異常所見なし 3 例であった。さらに高血圧症,

あるいは動脈硬化症の出現に関連あると考えられている血中コレステロールに関しては別に発表する。

III その他

検尿による蛋白陽性例は高血圧症合併例に多

く, また糖陽性例は 1 例もなかった。

結 語

私達は石川県高校職員40歳以上 546 例を対象とした成人病集団検診を企画し, 実施した。発見したおもな胃疾患は胃潰瘍 3 例, 同疑 7 例, 十二指腸潰瘍 4 例, 同疑 6 例, 胃十二指腸潰瘍 2 例で全例男性に見られ, その他胃炎 39 例, 胃下垂 62 例で胃炎は男性に多く, 胃下垂は女性に多い。また男性の 1 例にヒルシスブルグ氏病が見られた。胃症状の訴えあるいは検便潜血反応の検索結果より一見胃間接 X 線所見において異常なき例より有所見を発見できたことは, 胃集団検診における「みのがし」を少しでも少な

くするためにも胃間接 X 線撮影, 胃症状の訴え, さらに検便潜血反応の三者が必須検索事項であるとする。

高血圧検診では年齢の進むに従って高い血圧を呈する例数が増加し, Master の規準による分類では縮期圧, ち期圧共に潜在性高血圧と見なされる亜高血圧群が 50 歳より増加し, 高血圧症例は 55 歳より増加する傾向が伺えた。

稿を終るに臨み御懇篤なる御指導ならびに有意義な御助言をいただいた柿下正道教授, 石川県教育長三輪武雄氏に対し深甚なる謝意を表します。

文 献

- 1) 卜部美代志, その他: 成人病集団検診, 第一報, 金大結研年報, 20(中), 103, 1962.
- 2) 水上哲次, その他: 成人病集団検診, 第二報.

- 金大結研年報, 22(下), 117, 1964.
- 3) 黒川利雄, 長谷川昭衛: 日本医師会雑誌, 53(7), 777, 1964.

表2 40歳以上検診人員546例の年齢別、病類別比較表(実数) 昭和38年度 ()内は%

病類別		胃潰瘍	同 疑	十二指腸潰瘍	同 疑	胃十二指腸潰瘍	胃 炎	胃下垂	その他	胃切除後の状態	異常所見なし	計
年齢	性											
65~69	男										1	1
	女											1
60~64	男				1 (6.2)		1 (6.2)	5(31.2)			9(56.2)	16
	女											16
55~59	男	2 (2.0)	2 (2.0)			1 (1.0)	6 (6.0)	7 (7.0)	1 (1.0)	4 (4.0)	76(76.7)	99
	女							2(10.0)				2
50~54	男	1 (0.6)	3 (2.0)		1 (0.6)		10 (6.9)	10 (6.9)	1 (0.6)	5 (3.4)	113(78.4)	144
	女						2(16.6)	3(25.0)		1 (8.3)	6(50.0)	12
45~49	男		1 (0.9)	1 (0.9)	3 (2.7)		7 (6.3)	9 (8.4)		2 (1.8)	83(78.3)	106
	女						1 (5.2)	12(41.3)			16(55.1)	29
40~44	男		1 (0.8)	3 (2.6)	1 (0.8)	1 (0.8)	12(10.5)	8 (7.0)		5 (4.3)	83(72.8)	114
	女							6(26.0)			17(73.9)	23
計	男	3 (0.6)	7 (1.4)	4 (0.8)	6 (1.2)	2 (0.4)	36 (7.5)	39 (8.1)	2 (0.4)	16 (3.3)	365(80.2)	480
	女						3 (4.5)	23(34.8)		1 (1.5)	39(62.1)	66

表3 40歳以上胃検診病類別，年齢別，胃症状訴え比較表（実数） 昭和38年度

年齢	性別	病類別 胃の訴え	胃潰瘍	同 疑	十二指腸潰瘍	同 疑	胃十二指腸潰瘍	胃 炎	胃下垂	その他	胃切除後の状態	異常所見なし	計	
65~69	男	++~+++ + -										1	1	1
	女	++~+++ + -												1
60~64	男	++~+++ + -				1		1	1	4		3	4	16
	女	++~+++ + -										6	12	16
55~59	男	++~+++ + -	1	1			1	1	1	1	1	13	20	99
	女	++~+++ + -	1	1				5	3	3	4	63	77	101
50~54	男	++~+++ + -	1	2		1		3	4	1	1	14	25	144
	女	++~+++ + -		1				7	6	1	4	98	118	156
45~49	男	++~+++ + -		1	1	2		2	1		2	28	33	106
	女	++~+++ + -				1		5	7		2	54	71	135
40~44	男	++~+++ + -		1	3	1	1	2	1		1	19	27	114
	女	++~+++ + -						7	4		4	60	80	137
計	男	++~+++ + -	1	4	4	3	1	9	12	1	2	77	109	480
	女	++~+++ + -	2	3	4	3	1	25	24	1	14	272	349	546
							3	16			1	9	16	66
												30	50	

++~+++ 中等度以上
+……………軽度
-……………訴えなし

表4 40歳以上胃検診病類別，年齢別，潜血反応比較表（実数）

昭和38年度

（ ）内は女性を示す。

年齢	病類別 反応度		胃潰瘍	同 疑	十二指腸潰瘍	同 疑	胃十二指腸潰瘍	胃 炎	胃下垂	その他	胃切除後の状態	異常所見なし	計
	陽性	陰性											
65~69	陽性	陰性										1	1
60~64	陽性	陰性				1		1	1 2 2			9	2 2 12
55~59	陽性	陰性	2	2			1	5	1 2 4 (2)	1	2 2	7 4 62 3	11 6 79 (2) 3
50~54	陽性	陰性	1	3		1		1 9 (2)	2 2 5 (3) 1	1	2 2 (1) 1	10 6 (1) 91 (2) 6 (3)	15 9 (1) 112 (8) 8 (3)
45~49	陽性	陰性		1	1	3		1 6 (1)	1 (3) (3) 8 (6)		2	7 (1) (1) 73 (12) 3 (2)	9 (4) (4) 94 (19) 3 (2)
40~44	陽性	陰性		1		1	1	3 1 8	1 6 (6) 1		3 2	1 (4) 4 75 (11) 4 (2)	8 (4) 6 94 (17) 6 (2)
計	陽性	陰性	3	1 6	2 1	1 1 4	2	6 1 29 (3)	6 (3) 6 (3) 25 (17) 2	2	7 8 (1) 1	25 (5) 14 (2) 311 (25) 16 (7)	45 (8) 23 (5) 392 (46) 20 (7)

表5 30歳以上検診人員年齢別, 性別血圧(縮期圧)ひん度比較表(実数)

昭和38年度

()内は%

血 圧		99以下	100~109	110~119	120~129	130~139	140~149	150~159	160~169	170~179	180~189	190~199	200以上	計
年 齢	性													
65~69	男								1					1
	女													1
60~64	男			1 (6.2)	1 (6.2)	3(18.7)	4(25.0)	4(25.0)		2(12.5)	1 (6.2)			16
	女													16
55~59	男	1 (1.0)	4 (4.0)	10(10.1)	10(10.1)	21(21.2)	14(14.1)	17(17.1)	6 (6.0)	6 (6.0)	6 (6.0)	3 (3.0)	1 (1.0)	99
	女				1(50.0)					1(50.0)				2
50~54	男		5 (3.4)	23(15.9)	25(17.3)	32(22.2)	17(11.8)	18(12.5)	11 (7.6)	5 (3.4)	5 (3.4)	1 (0.6)	2 (1.3)	144
	女				2(16.6)	6(50.0)	2(16.6)			1 (8.3)			1 (8.3)	12
45~49	男	0 (0.9)	4 (3.7)	26(24.5)	23(15.9)	25(23.5)	13(12.2)	5 (4.7)	3 (2.8)	3 (2.8)	1 (0.9)	2 (1.8)		106
	女		1 (3.4)	5(17.2)	8(27.5)	8(27.5)	4(13.7)	1 (3.4)	1 (3.4)		1 (3.4)			29
40~44	男	1 (0.8)	12(10.5)	17(14.9)	31(27.1)	26(22.8)	11 (9.6)	6 (5.2)	5 (4.3)	3 (2.6)	2 (1.7)			114
	女		1 (4.3)	5(21.7)	6(26.0)	7(30.4)	3(13.0)	1 (4.3)						23
35~39	男			1(33.3)		2(66.6)								3
	女	1 (1.0)												1
30~34	男		2(50.0)	2(50.0)										4
	女													4
計	男	3 (0.6)	27 (5.5)	80(16.4)	90(18.4)	109(22.3)	59(12.1)	50(10.2)	26 (5.3)	19 (3.9)	15 (3.0)	6 (1.2)	3 (0.6)	487
	女	1 (1.4)	2 (2.9)	10(14.9)	17(25.3)	21(31.3)	9(13.4)	2 (2.9)	1 (1.4)	2 (2.9)	1 (1.4)		1 (1.4)	67

表6 30歳以上検診人員年齢別、性別血圧（ち期圧）と心度比較表（実数）

昭和38年度

()内は%

血 圧		50以下	50~59	60~69	70~79	80~89	90~99	100~109	110~119	120以上	計	
年齢	性											
65~69	男							1			1	1
	女											
60~64	男			2(12.5)	3(18.7)	3(18.7)	6(37.5)	2(12.5)			16	16
	女											
55~59	男			8 (8.0)	26(26.2)	23(23.2)	22(22.2)	12(12.1)	5 (5.0)	3 (3.0)	99	101
	女					1(50.0)	1(50.0)				2	
51~54	男	1 (0.6)	1 (0.6)	15(10.4)	37(25.6)	42(29.1)	32(22.2)	13 (9.0)	2 (1.3)	1 (0.6)	144	156
	女				2(16.6)	7(58.3)	2(16.6)		1 (8.3)		12	
45~49	男	1 (0.9)	1 (0.9)	10 (9.4)	39(36.7)	25(23.5)	25(23.5)	1 (0.9)	3 (2.8)	1 (0.9)	106	135
	女			3(15.7)	11(37.9)	8(27.5)	7(24.1)				29	
40~44	男		2 (1.7)	12(10.5)	49(42.9)	32(28.0)	7 (6.1)	8 (7.0)	1 (0.8)	3 (2.6)	114	137
	女			4(17.3)	12(52.1)	3(13.0)	3(13.0)	1 (4.3)			23	
35~39	男				1(33.3)	2(66.6)					3	4
	女		1 (1.0)								1	
30~34	男		1(25.0)	1 (25.0)		2(50.0)					4	4
	女											
計	男	2 (0.4)	5 (1.0)	48 (9.8)	155(31.8)	129(26.4)	93(18.8)	37 (7.5)	11 (2.2)	8 (1.6)	487	554
	女		1 (1.4)	7(10.4)	25(37.3)	19(28.3)	13(19.4)	1 (1.4)	1 (1.4)		67	

表7 40歳以上検診人員479例の血圧(縮期圧)のMasterの基準による分類比較表(実数)
昭和38年度 ()内は%

年齢	性別	Masterの基準			低血圧	亜低血圧	正常	亜高血圧	高血圧	計
		低血圧 上限 mmHg	正常域 mmHg	高血圧 下限 mmHg						
60~64	男	108	115~170	190			14(87.4)	2(12.5)		16
	女	108	115~175	190						
55~59	男	106	115~165	180	2 (2.0)	1 (1.0)	79(79.4)	8 (8.0)	9 (9.0)	99
	女	105	110~170	180			2			
50~54	男	105	115~160	175	3 (3.0)	11 (7.6)	109(75.6)	11 (7.6)	10 (6.9)	114
	女	105	110~165	180			10	1		
45~49	男	104	110~155	170	2 (1.8)	3 (2.8)	92(86.7)	3 (2.8)	6 (5.6)	106
	女	100	105~155	175		1	25	2	1	
40~44	男	102	110~150	165		11 (9.6)	89(78.0)	8 (7.0)	6 (5.2)	114
	女	100	105~155	175			23			
計	男				7 (1.4)	26 (5.4)	383(79.9)	32 (6.6)	31 (6.4)	479
	女					1	60	3	2	

表8 40歳以上検診人員479例の血圧(ち期圧)のMasterの基準による分類比較表(実数)
昭和38年度 ()内は%

年齢	性別	Masterの基準			低血圧	亜低血圧	正常	亜高血圧	高血圧	計
		低血圧 上限 mmHg	正常域 mmHg	高血圧 下限 mmHg						
60~64	男	06	70~ 98	110			14(87.4)	2(12.5)		16
	女	60	70~100	110						
55~59	男	60	70~ 98	108			79(79.7)	12(12.1)	8 (8.0)	99
	女	60	70~100	108			2			
50~54	男	60	70~ 98	106	2 (1.3)	14 (9.7)	112(77.7)	12 (8.3)	4 (2.7)	144
	女	60	70~100	108			11		1	
45~49	男	60	70~ 96	104			100(94.3)	2 (1.8)	4 (3.7)	106
	女	60	65~ 96	105		3	26			
40~44	男	60	70~ 94	100	1 (0.8)	2 (1.7)	97(85.1)	2 (1.7)	12(10.5)	114
	女	60	65~ 92	100			22		1	
計	男				3 (0.6)	16 (3.3)	402(83.9)	30 (6.2)	28 (5.8)	479
	女					3	61		2	

表9 40歳以上479例の Master の基準による縮期圧とち期圧の組合せ比較表 (実数)
昭和38年度 ()内は%

年齢	血圧縮ち I 高血圧 高血圧	II 高血圧 亜高血圧	III 高血圧 正常	IV 亜高血圧 高血圧	V 亜高血圧 亜高血圧	VI 亜高血圧 正常	VII 正常 高血圧	VIII 正常 亜高血圧	異常群 計	正常群	計
60~64						2(12.5)		2(12.5)	4(25.0)	12(75.0)	16
55~59	3 (3.0)	3 (3.0)	2 (2.0)	4 (4.0)	2 (2.0)	6 (6.0)	2 (2.0)	3 (3.0)	25(25.0)	74(74.0)	99
50~54	3 (2.0)		1 (0.6)	3 (2.0)	3 (2.0)	6 (4.1)	4 (2.7)	8 (4.5)	28(19.4)	116 (80.5)	144
45~49	3 (2.7)	1 (0.9)		1 (0.9)		1 (0.9)	2 (1.8)	2 (1.8)	10 (9.4)	96(90.5)	106
40~44	5 (4.3)	4 (3.5)	3 (2.6)		1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	3 (2.6)	18(15.7)	96(84.2)	114
計	14 (9.8)	8 (1.6)	6 (1.2)	8 (1.6)	6 (1.2)	16 (3.3)	9 (1.8)	18 (3.7)	85(17.7)	394 (82.2)	479

図1. 40歳以上検診人員479例の年齢別血圧
ひん度曲線比較表 昭和38年度

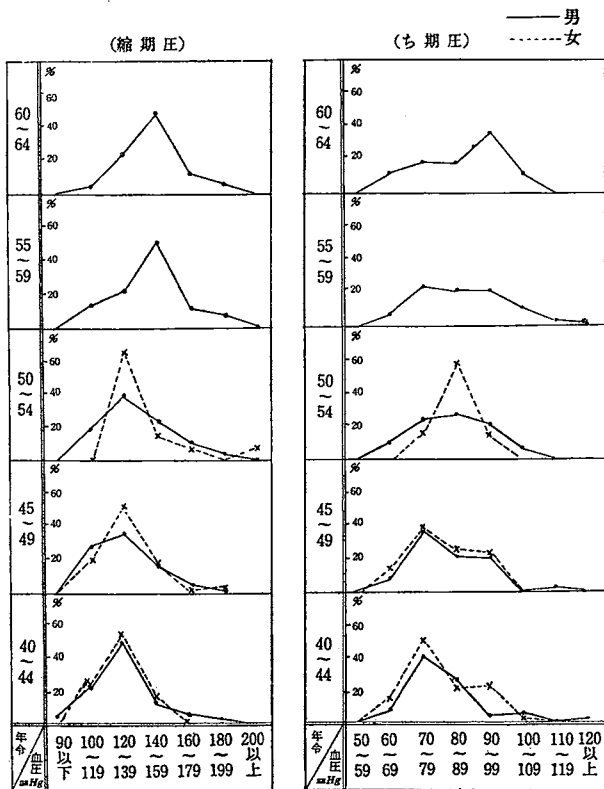


図2. 40歳以上検診人員479例のMaster規
準による血圧ひん度曲線比較表 昭和38年度

